

立って食べるふるまい

——その意識と行動——

奥 田 和 子

は じ め に

わが国では、昔から立って食べることは行儀の悪いこととして戒められてきた¹⁾。しかし、最近では若い世代の人たちは街角や店先で立って平気で飲食するようになった。立って食べることが新たな潮流となりつつあるにもかかわらず、その意識や行動の実態は明らかでない。ましてその方向性やあり方にふれたものはほとんどみあたらない。

著者はこれまで、食卓をとりまく状況がめまぐるしく変化していくなかで、食事マナーや食事のルールが大幅に変化しつつあることを指摘してきた²⁾³⁾。食事中のふるまいも、時代社会の流れに適応しながらよりよい方向をみつけていくことが必要ではなからうか。

本稿では、まず高校生男女とその親を一つのケースとして、立ち食いの実態とその背後にひそむ意識を探った。その結果、立って食べることはすでに日常化しているので、これに市民権を与え、「立って食べることは見苦しいこと」というこれまでの位置づけを転換するように提案した。

今後これをもとに、立って食べることが洗練されたふるまいとして成立するための要件および食べ方のルールを探りたい。

1. 調 査 方 法

1987年6月神戸市公立高校生男子100名、女子98名、計198名、その保護者（以下大人と呼ぶ）男22名、女43名、計65名（40代57％、30代17％、50代25％）を対象にアンケート調査を行った。ここでいう「立って食べること」の意味あいはいわゆる世間でいう立ち食いである。立食パーティは立食を前提に設定された食事形式であるから、本調査ではひとまず除外した。

2. 結果および考察

1) 立って食べること

立って食べる頻度を<よくある>、<たまにある>、<めったにない>の3段階で自己評価してもらった。（表1）。

表1 立ってものを食べることがありますか

	男子生徒		女子生徒		大 人	
	n	%	n	%	n	%
よ く あ る	27	27	14	14	1	1
た ま に あ る	49	49	49	50	18	28
め っ た に な い	19	19	33	34	33	51
全 く な い	4	4	2	2	13	20
無 記 入	1	1	0	0	0	0
合 計	100	100	98	100	65	100

<よくある>と答えたものは男子生徒27％、女子生徒14％で、大人はわずか1％であった。<たまにある>と答えたものは、男女生徒とも半数であった。一方大人は<めったにない>が半数であった。男子生徒の方が女子生徒より、大人より高校生の方が立って食べる頻度が高いことがわかった。

フランスのメルシェは、立ち食いの人々という一節で「革命前から橋の上に屋台が出て鰻のフライ、プラム、レーズン豆、サラダなどを売っていた。そ

して40年後7月王政期になってもソーセージ、じゃがいもなどが同じ場所で売られており、これを古新聞に包んでもらって食べた。」という⁴⁾。いわば恵まれない人たちが街角で立ち食いをしたようであり、立って食べる、いわゆる立ち食いは、上流の人々の間で広まったものではないらしい。

一方、わが国でも江戸時代から屋台があった。屋台のすしは立って食べ、そのときのすしは手でつまんでいたという⁵⁾。若い人たちの間で立って食べることが盛んになってきたのは、おそらく立ち食いそばチェーン店開店(1965)⁶⁾、マクドナルドファーストフード店万博に開店(1970)⁶⁾、飲料自動販売機普及(133万台, 1977)⁶⁾、立ち飲みコーヒー店チェーン登場(1980)⁶⁾など1970年代後半にかけて立って飲食できる店が増えたためであろう。さらに、都市部では地価の高騰によって店舗面積が手狭になり、座席が十分確保できないという社会状況もかかわっている。女子は男子に比べて立って食べるケースが少なかったが、最近では洋酒の立ち飲み店が銀座に誕生し、女性客で賑わっている⁷⁾。立って飲食することは、一種のファッション性を帯びてきつつあるが、今後立って飲食する店が増えるにつれ、そうした人口もさらに増大することが予想される。

2) 誰と立って食べるか

男女生徒のうち、7, 8割のものが、友達、先輩、後輩と一緒に食べてい

表2 誰と立って食べますか

		複数回答			
		男子生徒		女子生徒	
		n	%	n	%
友 達		69	54	90	81
先 輩	後 輩	17	12	8	7
兄 弟	姉 妹	9	7	6	5
	親	2	2	4	4
そ の 他		2	2	0	0
無 記 入		29	23	3	3
合 計		128	100	111	100

た。親兄弟と一緒にのものは10%程度で少ない。男子生徒に無記入者が目立ったのは表3で示すように1人で食べるものがいたためである。(表2)

立って食べる時、最低何人と一緒に食べるかその人数を尋ねた。男子生徒では1人、2人、3人、ついで5人が多い。一方、女子生徒では1人はほとんどなく、2～3人という人が多い。女生徒は男生徒に比べて少人数であった。(表3)

表3 立って食べる時の人数は最低何人ですか

		男子生徒		女子生徒	
		n	%	n	%
1	人	24	24	3	3
2		22	22	34	35
3		18	18	32	33
4		4	4	14	14
5		12	12	7	7
5 以上		7	7	5	5
いろいろ		3	3	0	0
無 記 入		10	10	3	3
合 計		100	100	98	100

男女生徒は、主に友達や先輩、後輩と複数で立って食べていることがわかる。しかし男子生徒は1人の場合でも立って食べているが女子生徒はなぜか1人で立って食べるものは少ない。男子生徒で1人で立って食べている場合、友人とのコミュニケーションを深めるためではなく、ただ飲食目的のようである。男女間の差が明瞭にみられた。

いずれにしろ、学校生活の延長線上に飲食があり、行き帰りのコミュニケーションの道具として飲食物が位置づけられている。本学の学生を対象にハンバーガーショップの利用動機を調査したことがある⁸⁾。その第1位は、飲食目的というよりむしろ友人とのコミュニケーションのためであった。ハンバーガーショップはいわゆるサロンの役割を果たしている。

3) 立って食べる場所

立って食べる場所は、1) 店の中、2) 店の前、3) 店以外の場所—道ばた、駅のホーム、公園、乗物の中など、4) 特別の場所—行楽地、出店（祭など）に大きく分けられた。（表4）

表4 どんな所で立って食べますか

複数回答

	男子生徒		女子生徒		大 人	
	n	%	n	%	n	%
1) 店 の 中	31	13	18	8	11	11
2) 店 の 前	39	16	35	15	5	5
3) 店以外の場所	(99)	(40)	(76)	(33)	(22)	(23)
道 ば た	60	25	39	17	2	3
駅（ホーム）	18	7	10	4	8	8
公園（遊園地）	15	6	22	10	9	9
乗 物 の 中	6	2	5	2	3	3
4) 特別の場所	(70)	(29)	(97)	(43)	(45)	(45)
行 楽 地	17	7	31	14	20	20
出店（祭など）	53	22	66	29	25	25
そ の 他	2	1	3	1	2	2
無 記 入	2	1	0	0	14	14
合 計	243	100	229	100	99	100

男子生徒は、いわゆる所かまわずという3)が40%で最も多く、4)特別の場所29%、店の前・中がそれぞれ16%、13%である。一方女子生徒は、4)特別の場所43%、3)所かまわずが33%、店の前・中がそれぞれ15%、8%である。大人は、4)特別の場所が45%で、所かまわずが23%、店の前・中がそれぞれ11%、5%であった。

4)の祭や行事をハレの場所とし、1)～3)を日常とすると、男女生徒ともに日常の場所で立ち食いをしている。つまり、立って食べることは日常化していることがわかる。とくに男子生徒は、道ばたや店先で食べている。一方、大人はハレの場所では立って食べるものが1/3で、道ばたや店先ではあまり食べないことがわかる。世代間の差が明瞭にみられた。大人の世代はハレの場所ですら立って食べてもさしつかえないと考えており、ハレとケで

けじめをつけているようである。

ハレとケのけじめについて、高取氏は「帯をしない状態で着物を着ながしにするのは、ハレでは許されることであるが、ケでは大変嫌われる。この理由は、ハレとケのけじめのなさがいちだんと人々の不快感をさそうからであり、戸外でむやみにものを食べるのも同じ論法ではないだろうか」⁹⁾という。ハレの世界の一節で、金林氏は、「日々の暮らしのほかに、祝いの日があって、マンネリ化しそうな日常生活の中に適度の潤いと憩いをもたらすための先人の智慧だ。」¹⁰⁾という。そのときだけは無作法が許されたのだろう。大人たちの結果だけ、こうした傾向がみられるのは興味深い。

立ち食いが増える原因として、店に座席が不足していること、道ばたや公園にベンチが少ないことなどもあげられる。また、ホームや乗物内も増えているし、最近では、大学のキャンパス内で飲料を買い廊下から教室へと持ち込まれるケースもみかける。授業を聞きながら、あそびながら、歩きながら飲食するいわゆるながら族が増えた。飲食とあそび、飲食と仕事の境界線が崩れ、飲食が息抜きの玩具としての役目をし、あそびそのものになってきた。こうした背景がところかまわず飲食をするという現象をひきおこしているようである。

飲食ではないが、ガムやアメをしゃぶることについて、高取氏は、「子どものころ、大人はくわえたばこで道を歩くのに、どうしてアメをねぶりながら歩いてはいけないのかとたずねて、老人に理屈をいうなとしかられた記憶がある。野球の選手がガムをかみながらバッテリーボックスに立つのを見るなど思いもよらなかった。いまでも戸外でむやみに口を動かすことは、いささかの抵抗感がある」¹¹⁾と指摘する。しかし、最近では屋内でアメやガムを口にするものは多い。食べたいときが食べるときという信条である。

4) 立って食べる食べ物

主なものは、間食程度の軽いアイスクリーム、飲み物、菓子、男子生徒ではそれに立ち食いそばが、女子生徒はクレープが加わる。大人は、飲み物、

表5 どんなものを立って食べますか

	男子生徒		女子生徒		複数回答	
	n	%	n	%	大 n	人 %
アイスクリーム	64	21	81	35	26	23
クレープ	13	4	40	18	1	1
飲み物	75	25	61	26	32	27
お菓子	46	15	21	9	12	11
パン	20	7	8	4	6	5
ハンバーガー類	26	9	6	3	5	4
立ち食いそば	51	17	8	4	19	17
その他	4	1	1	1	3	3
無記入	4	1	0	0	10	9
合 計	303	100	226	100	114	100

アイスクリーム、立ち食いそばが多い。そのほかにパンやハンバーガー類などである。立ち食いそばを除いて、いずれも手食できるものか、またはアイスクリームのように簡単なスプーンで食べられるものである。(表5)

こうした食べ物に共通な特徴は、容器や包装がうまく工夫されていること、使い捨てスプーンなど便利な用具がセットされていることである。

飲物では町角や駅のホームのいたるところに自動販売機が設置され、利用されている。これと上述の食べ物(例えば菓子、スナック類)とが組み合わせられて立ち食いを一層可能なものになっている。

食べ物の内容は、そばを除くといわゆるあい食い(中間食)や間食が多い。従来は、一日三回食ときまっていたが、今日では少量ずつ気の向いたときに食べる多回食者が増えた¹²⁾。飲食物が町にあふれているため、いつでも飲食できるという気易さに支えられた多回食である。その結果、行きつく先でどこかまわらず立って食べることになるのであろう。

5) どんなときに立って食べるか

立って食べるときは1) 店に椅子がない 2) 気分的に立って食べたい 3) まわりが立って食べる 4) 急いでいるに分けられた。(表6)

表6 どんなときに立って食べますか

	男子生徒		女子生徒		大 人	
	n	%	n	%	n	%
店に椅子がないとき	52	33	54	44	23	26
まわりの人が立って食べているとき	25	16	29	21	19	22
気分的に立って食べたいとき	36	23	27	19	18	20
急いでいるとき	26	17	17	12	8	9
そ の 他	11	7	3	2	5	6
無 記 入	6	4	2	2	15	17
合 計	156	100	132	100	88	100

男女生徒ともに1)の理由, すなわち店に椅子がないために仕方なくというのが3~4割であったが, それだけではない。まわりの人が立っているし, 気分的に立って食べたいと積極的に受入れているものが4割いる。急いでいるからというのは,それほど多くなかった。

立って食べるというのは, まわりの雰囲気にあわせて自分を仲間入りさせたいという仲間意識のあらわれである。立って食べるとおいしいのではないかという好奇心もある。また, 立って食べるということは, 自由に移動で

表7 他人が座っていても立って食べることができるかどうか
立って食べることの頻度の関係

		他の人が座っていても立って食べることができますか							
		は い		いいえ		無記入		合 計	
		n	%	n	%	n	%	n	%
男子生徒	よくある	22	22	4	4	1	1	27	27
	たまにある	27	27	19	19	3	3	49	49
	めったにない	5	5	14	14	0	0	19	19
	全くない	0	0	4	4	0	0	4	4
	無 記 入	0	0	1	1	0	0	1	1
合 計		54	54	42	42	4	4	100	100
女子生徒	よくある	10	10	4	4	0	0	14	14
	たまにある	15	16	32	32	2	2	49	50
	めったにない	4	4	29	30	0	0	33	34
	全くない	0	0	2	2	0	0	2	2
	合 計	29	30	67	68	2	2	98	100

き、友人とも話しやすいという利点がある。特に数人の場合はなおさらである。立ち食いには解放的で愉快的な雰囲気がある。また、掟を破るといったスリルや快感があるのかもしれない。

まわりが立って食べるから自分も立って食べるという理由があげられていたので、逆にまわりがもし座っていてもあなたは立って食べることができるかどうかを尋ねた。その結果、男子生徒は「はい」が約半数であったのに対して、女子生徒は7割が「いいえ」と否定した。男子生徒はまわりを気にしないが女子生徒はまわりの雰囲気に敏感で、人がするから自分もするという同調意識が強い。ここにも男女間の差が歴然としていた。(表7)

同上の質問を立て食べる頻度別にみると、立って食べる頻度の高い人たちは、他の人が座って食べている場合でも立って食べることができる。立って食べることをめったにしない人たちは、逆に他の人が座っている場合には立って食べることができない。よく立って食べる人ほど、他人を気にしていない。おそらく、立って食べることに慣れ、習慣化しているため平気になれるのだろう。

6) 立って食べることへの抵抗感

立って食べることにに対してどの程度抵抗を感じるか、その程度を調べた。(表8)

男女生徒と大人の3者を比較すると、特徴的な差がみられた。男子生徒は

表8 立って食べることに抵抗を感じますか

	男子生徒		女子生徒		大人	
	n	%	n	%	n	%
とても感じる	3	3	7	7	10	15
少し感じる	13	13	33	34	22	34
感じることもある	24	24	32	33	19	29
ほとんど感じない	32	32	21	21	13	20
全く感じない	24	24	4	4	1	2
無記入	4	4	1	1	0	0
合 計	100	100	98	100	65	100

表9 立って食べることにに対する抵抗感と立ってものを食べる頻度

		立ってものを食べることはあるか									
		よくある n %		たまにある n %		めったにない n %		全くない n %		合計 n %	
立ってものを食べることに抵抗を感じるか	男子生徒	とても感じる	1 1	0 0	1 1	1 1	1 1	3 3	3 3		
	少し感じる	1 1	9 9	1 1	2 2	13 13	13 13				
	感じることもある	2 2	10 10	12 12	0 0	24 24	24 24				
	ほとんど感じない	12 12	18 18	2 2	0 0	32 32	32 32				
	全く感じない	9 9	10 10	3 3	1 1	24 24	24 24				
	無記入	2 2	2 2	0 0	0 0	4 4	4 4				
	合 計	27 27	49 49	19 19	4 4	100 100	100 100				
女子生徒	とても感じる	0 0	2 2	4 4	1 1	7 7	7 7				
	少し感じる	1 1	17 17	14 15	1 1	33 34	33 34				
	感じることもある	5 5	17 17	10 10	0 0	32 32	32 32				
	ほとんど感じない	6 6	10 10	5 5	0 0	21 21	21 21				
	全く感じない	2 2	2 2	0 0	0 0	4 4	4 4				
	無記入	0 0	1 1	0 0	0 0	1 1	1 1				
	合 計	14 14	49 50	33 34	2 2	98 100	98 100				
大人	とても感じる	0 0	1 2	5 7	4 6	10 15	10 15				
	少し感じる	0 0	4 6	13 20	5 8	22 34	22 34				
	感じることもある	0 0	11 17	6 9	2 3	19 29	19 29				
	ほとんど感じない	1 2	2 3	8 12	2 3	13 20	13 20				
	全く感じない	0 0	0 0	1 2	0 0	1 2	1 2				
	無記入	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0	0 0				
	合 計	1 2	18 28	33 50	13 20	65 100	65 100				

全く抵抗を感じないか、もしくはほとんど感じないものが半数をこえた。一方、女子生徒は、少し感じる、感じることもあるが7割弱であった。大人は程度の差はあるを感じるものが8割で最も抵抗感が強い。

立ち食いをしているわりには、生徒たちはかなり抵抗感をもっていることが明らかである。とくに女子生徒に強いことがわかった。大人はさらに強い抵抗感をもつ。

立ってものを食べることに抵抗を感じる程度と立ってものを食べる頻度と

の関連性をみたのが表9である。

立ってものを食べる頻度の少ないものほど、抵抗を感じる程度が強いことがわかった。立って食べることへの抵抗意識が行動を規制している傾向がみられ、よく立って食べる人ほど、立って食べることへの抵抗感が薄い。

7) 抵抗を感じる理由

程度の差こそあれ、立って食べることに抵抗を感じるものに対して、なぜ抵抗を感じるのかを尋ねた結果、男女生徒とも行儀が悪いから、みっともないからの2つの理由が4～5割であった。この他に落ちつかないからという理由や立って食べてはいけないと教えられたからという理由があげられていた。(表10)

このことから、立って食べる抵抗感というのは、食べにくいとか落ちつかないという理由より、むしろ行儀が悪いという意識によることがわかる。また、この行為は、みっともない、ていさいが悪いという認識がある。

抵抗感の有無、行儀の良し悪しの認識の差はどこからくるのだろうか。

表10 なぜ抵抗を感じるのですか

	男子生徒		女子生徒	
	n	% ¹⁾	n	% ²⁾
行 儀 が 悪 い か ら	22	55	34	47
み っ と も な い か ら	17	43	28	39
落 ち つ か な い か ら	9	23	12	17
してはいけないと教えられたから	6	15	11	15
そ の 他	4	10	1	1
合 計	58	40	86	72

1) 40に対する比率 2) 72に対する比率

8) 立って食べているのを人に見られた場合

立って食べるという行為の裏には行儀が悪い、みっともないという意識がひそんでいた。そこで、他人にみられることを嫌がっているのではないかと考え、立って食べているのを知りあいに見られると困るか尋ねた結果、男

表11 立って食べているのを知りあいに見られると困りますか

	男子生徒		女子生徒	
	n	%	n	%
困る	5	5	6	6
少し困る	5	5	31	32
あまり困らない	40	40	43	44
全然困らない	47	47	18	18
無記入	3	3	0	0
合計	100	100	98	100

表12 誰に見られると困るのですか

	男子生徒		女子生徒	
	n	%	n	%
父	2	2	12	9
母	2	2	18	14
先生	5	4	13	10
友達	4	4	4	3
異性	2	2	3	2
親類	4	4	7	5
兄弟姉妹	2	2	3	2
祖父母	2	2	2	1
近所の人	3	2	13	10
その他	2	2	2	1
無記入	85	74	59	43
合計	113	100	136	100

子生徒と女子生徒では異なり男女間の差が明瞭であった。(表11)

男子生徒は、困らない(あまり, 全然)が87%であったのに対して, 女子生徒は困ると困らないが4:6であった。女子生徒は知りあいに見られたくないという思いを抱くものが男子の4倍もある。

では, いったいその知りあいとは誰か。男子生徒は, なんらかの形で自分を知っている人たちに見られるのを嫌がっていて, 特定の人ではない。しかし, 女子生徒では特徴的で, 父母や先生, 近所の人ということであった。(表12)

なぜ女子生徒は知っている人に立って食べている姿を見られると困るのか, その理由を尋ねた。その結果, <みっともないから><立ち食いしない

表13 なぜ困るのですか

複数回答

	男子生徒		女子生徒	
	n	%	n	%
みっともないから	13	12	30	30
しないように言われているから	6	6	11	11
学校で禁止されているから	2	2	2	2
その他の	3	3	1	1
無記入	79	77	55	56
合計	103	100	99	100

ようにいわれているから> が40%を示し、男子の2倍であった。とくに、<みっともない>という意識は女子の方が男子の2倍多く、男女間の差が明瞭であった。(表13) これは、男女の意識の差に基づくものか、それとも男女のしつけの差によるものか疑問が残る。

立って食べることはみっともないことであるという教えは次のように示されている。草柳氏は、「中学時代の思い出として、近くの町の祭りにでかけ、屋台のポテトフライを食べながら歩き、それを近所の人に見られ、口から口へと伝わって母親の耳に入った。夕食の後の雑談で“歩きながら食べるなんてみっともないよ”と釘をさされた。“家のものまでだらしないのだろうと思われるじゃないか”この言葉に、家族全員にすまないことをしたような気になった」と述べている¹⁾。昭和の初期の話であろう。ハレの場でさえも立って食べたことをみっともないと家族のものに注意されている。やはり近所と肉親がうるさく監視しているのである。

9) 立って食べるのは悪いことというしつけ

立って食べてはいけないと教えられたことはありますかの問いに対して、男女生徒ともあると答えたものが圧倒的に多く、女子生徒(88%)の方が男子生徒(73%)よりも15%も高かった。また、教えられたことのないものは、男子(26%)の方が女子(12%)の2倍多かった。女子の方がしてはいけないというしつけを強くされていることがわかる。(表14)

立って食べてはいけないと教えられたことの有無と立って食べる頻度との

表14 立って食べることはいけないと教えられたことがありますか

		男子生徒		女子生徒	
		n	%	n	%
あ	る	73	73	86	88
な	い	26	26	12	12
無	記入	1	1	0	0
合	計	100	100	98	100

関連性を調べてみたが、両者には関連性がみいだせなかった。してはいけないと教えられた経験の有無は立って食べる頻度に影響していない。

誰に教えられたかを調べた結果、両親、先生、両親以外の順に多く、比率でみると5～6：2：1であった。両親が主に教え、先生（幼稚園から高校までの先生、特に小、中学校の先生）と両親以外の肉身が補助的に教えている。特徴的なのは、両親のしつけの関わり方が男女生徒間で異なる点である。父親の対応は男女間で差は小さいが、母親は男子より女子の方により多く教えており、男子6割、女子8割と差が大きかった。これは、女の子は日常母親とよく接触しているためという解釈もなりたつが、やはり女の子には男の子より厳しくしつけたいという母親の意気込みが感じられる。（表15）

表15 誰に教えられましたか 複数回答

	男子生徒		女子生徒	
	n	% ¹⁾	n	% ²⁾
父	40	40	33	34
母	62	62	82	84
兄 弟 姉 妹	5	5	3	3
祖 父 母	10	10	18	18
親 類	5	5	5	5
幼稚園の先生	11	11	7	7
小学校の先生	20	20	18	18
中学校の先生	14	14	17	17
高校の先生	4	4	1	1
そ の 他	3	3	1	1
無 記 入	25	25	2	2
合 計	199	100	187	98

1) 100人に対する% 2) 98人に対する%

男女生徒は、このように両親や先生から「立って食べてはいけない」と教えられているために、前項の結果に示すようにこうした人達に見られるのを嫌がっていることがわかった。いわば罪の意識をかぶせられていることがわかる。このように罪の意識をもちながら食べ物を食べることは、おいしく味わえないし、せっかくの楽しい雰囲気逆に暗いものになってしまう。

そればかりか、大人は、立って食べるときのふるまいのルールについてしつける機会さえも失ない、子供は学ぶことができない。つまりくさいものに蓋をしてしまっているわけである。

立って食べることは行儀の悪いことであるという根拠はいったいなんだろう。

一つには、食事の神性がかかわっているのかもしれない。「食事をしているときは、どこかで神さまがみており、神と人とが直接つながっている聖なる時間だろうか」¹³⁾ という指摘がある。食事というのは誠心誠意をもってするもので、精神と肉体が全力をあげて全人格的にたのしむものと¹⁴⁾考えられてきた。しかし、今日では食の神性が剝奪され、立ち食いもその一側面として捉えることができる¹⁵⁾。

1956年、ダイニングキッチンつき公団住宅が登場した頃からテーブルと椅子を使って食事をする人が増えたようである。それまでは日本人の多くは畳や板の間に坐って食事をしていた。杉山氏は、立つと坐るについて、「月や星を国旗にかかげる狩猟民族と、国旗に太陽をかかげる農耕民族の違いで、立って移動し走りまわった人々と、定住して田畑に腰を落ちつけ、しゃがんでいた人々の伝統の違いである。立っているのは落ちつかないというよりむしろ不愉快である」という¹⁶⁾。立って食べると落ちつかないという考えが根底にあるのではなからうか。また、多田氏は、「日常私たちになじみの姿勢は坐る姿勢である。坐るのが普通で、立っているのは普通でないという意見がある。いたずらをするとなたされた。坐るということ、その行為、その状態にまつわるモラル、美感、快適感等々は、日常生活のただなかに、それこそ「坐って」足をしまっている。坐りがいいのである。」¹⁷⁾「立つという姿勢は、

「動」の姿勢である。「静」の姿勢はやはり坐にある。」¹⁸⁾という。

座ることは、これまでの生活様式からすれば落ち着いた安定した美的な静の姿であったといえる。そこから、私たちの中に、座ることはよいことで、立っているのはよくないことだという意識が入りこんで定着してきたのだろう。根岸氏は、「私の少年の頃は、農家ではまだテーブルで食事をするというようなことはしなかった。めいめいの箱膳をもって、それで食事をした。」¹⁹⁾と述べている。少年の頃というのは、おそらく昭和4年前後のことであろう。一方、明治30年に入るとちゃぶ台がでまわりはじめ、それで座って食べるという習慣が生活に深く根をおろしたという。立ったままで食事することは、相当行儀の悪いことだったに違いない。しかし、今日では、椅子とテーブルで食事をするものは女子大生の家庭では87%で、座敷で座って食事をするものは僅かであった。畳に座る姿勢と椅子に座る姿勢では、後者の方がより立つ姿勢に近づく²⁰⁾。そうになると、悪さ加減も従来より薄らいでくるのではなかろうか。

以上のような理由がからみあって、立って食べることは悪いことという見方が定着したのだろう。そして立って食べることはみっともないことで恥しいことであるというしつけがされるようになったのだろう。

松原氏は、「戦前における日本人は、直系的な家族の中で育てられ、祖母の主導のもとで育てられ母親は実権をもたなかった。そのために周囲の毀誉褒貶に不断に心をくばってきた母や祖母から「恥の文化」的しつけをうけた。ことの是非善悪よりも他人から笑われないように恥かしくない行動をとることが重じられた。このようなしつけでしめあげられた子供は家長や近隣有力者の権威に従い、周囲の人びとの行動に同調することが処世の道として安定であると知らされた。こうして日本人は、権威主義的人間として、また主体に乏しい大勢順応の人間として形成された。」²¹⁾という。調査対象の高校生はほぼ1970年生まれであり、その親は戦後生まれで1950年前後であるが、戦前のこの見解と同じ意識をもつものが相当数いることは興味深い。

そこで、次に大人に対して、これまで自分の子供に立って食べることにつ

表16 大人：自分の子供が立って食べることに
ついてこれまで何かいったことがありますか

	大 n	人 %
小さい頃にはある	26	40
あまりいったことはない	23	35
全くない	11	17
絶えず言っている	4	6
無記入	1	2
合 計	65	100

いてなにか注意したことがあるか尋ねた。(表16)

子供が小さい頃には注意したことがあるもの40%で、絶えず言っているものも6%あった。あまりいったことはない、全くないが計52%であり、約半半であった。これは、表15の男女生徒の答えとよく一致した。

全く注意したことの無い人を除いて、どんなことをいったか、その内容を尋ねたところ、行儀が悪いからやめなさいが77%であった。約35%の大人は立って食べることを行儀の悪いこととしてとらえていることがわかった。

(表17)

ちなみに最近の新聞の政治欄²²⁾に、宮沢首相が「行儀が悪いから」といいわけをして、ミスさっぽろが手渡した観光宣伝のための「トウモロコシの試食を断わった」という記事がのっている。そのために一瞬、気まずい空気があたりに流れたと記されている。

表17 大人：どんなことをいいましたか

	複数回答	
	n ¹⁾	%
行儀が悪いからやめなさい	40	77
ホコリがついて汚ないからダメ	6	11
人目があるからやめなさい	3	6
服がよごれるからダメ	3	6
立って食べるなら買わない	0	0
合 計	52	100

1) 表16で全くないと無記入を除いた52人

表18 大人：子供がいくつになるまで口をはさみますか

	大 n	人 %
10才未満	1	2
10	9	14
12	3	5
13	1	2
15	6	9
16	1	2
18	2	3
20	2	3
年齢に関係なく	35	54
無 記 入	5	8
合 計	65	100

では、何才までそのような注意をしたかといえば、年齢に関係なく注意し続けてきた人が半数と、10代までと、15才までであった。(表18)

大人の態度は必ずしも一様でなく、半数の大人は注意をしないことがわかった。おそらく、立って食べることが悪いという判断をしていないためであろうと推察された。

10) 他人が立って食べるのを見てどう思うか

男女生徒自身は、大なり小なり立って食べることに抵抗を感じており、特に女子では7割をこえていた。そこで他人が立って食べているのをみてどう思ったかについて尋ねた。

男女生徒で最も多かったのは、場合によってはいけないという答えであった。男子生徒は、別になんとも思わないや別によいが4割あり、寛容である。一方女子生徒は行儀が悪い、みっともない、なんとも思わないがほぼ同率であった。大人は50%が行儀が悪い、みっともないで、残り40%は別によい、なんとも思わないに分かれた。大人が生徒と違う点は、場合によってはいいという限定的判断をしている人がいないことである。大人たちは行儀が悪いと思う人とそうでない人が半々いること、男女生徒は他人に対してはかなり寛

表19 立って食べている人をみてどう思いますか

複数回答

	男子生徒		女子生徒		大人	
	n	%	n	%	n	%
行儀が悪い	6	6	17	16	18	25
みっともない	8	8	11	10	17	24
いやしい	1	1	0	0	1	2
別に良い	18	17	7	7	13	18
自分もしたい	2	2	1	1	1	2
何も思わない	24	23	16	15	14	20
場合によってはいけない	41	37	54	51	0	0
その他の	3	3	0	0	5	7
無記入	3	3	0	0	1	2
合計	106	100	106	100	70	100

容であることがわかる。(表19)

場合によってはの意味あいであるが、他人に著しい迷惑がかからない場合、周囲の雰囲気著しくそこねない場合をさすようである。生徒は立って食べるマナーの限界を知っていて合理的な判断力をもっているものと推察された。

11) 自分の子供が立って食べるのを見たときの対応

自分の子供は立って食べていると思うかどうかの質問を大人にした結果、思うが71%でわからないが20%であった。(表20)

そこで、自分の子供が立って食べているのを見たとき、なんというかを尋ねて表21に示した。やめなさいというが20%、やめなさいとまではいわないが注意するが39%で、合計するとなんらかの注意するのが60%あった。しかし、なにもいわないが25%あった。

表20 自分の子供も立って食べていると思いますか

	大人	
	n	%
思う	46	71
わからない	13	20
思わない	6	9
合計	65	100

表21 自分の子供が立って食べているのをみたら
なんといいいますか

					複数回答	
					大 n	人 %
やめなさいとまでは言わないが注意する					26	39
何 も い わ な い					17	25
や め な さ い					13	19
お い し い か と き く					4	6
不 快 に 思 う					0	0
そ の 他					4	6
無 記 入					3	5
合 計					67	100

ま と め

立って食べることが若者の間で日常化しているのではないかと考え、その意識と行動の実態を高校生とその親をケースにして考察するのが本稿の目的であった。

1 立食パーティを除いて立って食べることは、〈たまに〉もしくは〈よくある〉と答えたものが7割で、予測通り日常化していた。女子生徒より男子生徒の方が多かった。

2 その7～8割は、友達や先輩、後輩と食べていた。そのときの人数は、1人のときもあるが、2～3人が多い。女生徒は1人ではほとんど食べない。

3 立って食べるのは、道ばた、駅のホーム、公園、乗物の中などところかまわず食べるものが多い。その他、店先、店の中、祭や行事のときである。立って食べることは空間的にも日常化していた。

4 アイスcream、飲み物、菓子、ハンバーガーなどのファーストフード、立ち食いそばなど多岐にわたった。

5 立って食べる理由は、店に椅子がないとき、まわりの人が立って食べているとき、気分的に立って食べたいときで、忙しいという理由は少ない。

雰囲気を楽しむ一面がのぞいている。女子生徒は、まわりが座っているときには立って食べない。

6 立って食べることに對して大なり小なり抵抗感をもっていることがわかった。特に女子ではそれが強い。立って食べる頻度の高いものほど抵抗感が少ないことを認めた。抵抗感を感じる理由は、行儀が悪い、みっともないという理由であった。立って食べる場所を人にみられるのは困ると思え、とくに女生徒にその傾向が強い。みられて困る人は、父母、先生、近所の人である。

7 抵抗感をもつ理由は、こういう人たちに「立って食べることは悪いこと」というしつけをされてきたからである。掟を破っているという罪の意識をかいまみることができる。特に女子生徒へのしつけは男子生徒よりきびしく、母親がその役割を担っていた。

8 しかし、男女生徒は他人が立って食べるのをみた場合にはかなり寛大であり、場合によってはいいという条件つきで容認していた。

9 大人が立って食べるのは、行楽や祭りのときが多く、道ばたや店先で食べることは稀である。立って食べることに對する抵抗感は、生徒に比べて一段と強い。大人は子供が立って食べているのをみたとき、立ってものを食べることは行儀が悪いことだからやめなさいというしつけをしているものが6割であった。それは、子供の頃だけでもしくは年齢に関係なくいい続けてきたようである。そして6割近いものは、自分の子供が立って食べているのを見て注意していることがわかった。

以上、立って食べることの行為の頻度や受けとめ方、意識には男女間に差が認められ、男子生徒の方がかなり自由に立って食べていることがわかった。また、大人と生徒との間にも大きな差が認められ、生徒の方が自由に受けとめている。

一方、個人をとりまく食環境に目を向けると、都市部では地価の高騰によって店舗面積がますます手狭になること、ファーストフードや出店などの店頭販売の拡大、ファーストフードの嗜好の増大などの諸条件があいまって屋

外で食べる機会は今後ますます強まる傾向が予測される。また立食パーティは今回省いたが、これは経済的で合理的なやり方として今後パーティの主流になる可能性もある。

立って食べるという食環境がますます拡大していくなかで、立って食べることは悪いことという考えはもはや一方的な押しつけではないか。立って食べることは悪いことという位置づけで立ち食いを片すみに追いやるのではなく、立って食べることを一つのふるまいとして容認し、そのためのマナーやルールを新たにつくりだすことが今日求められているのではないかと考える。

調査に協力いただいた飯田恭子、石岡幸枝、伊藤裕美、石川純子、尾本千晶、梶真寿美の各氏に深謝する。

文 献

- 1) 草柳大蔵：『グルメ時代の礼儀と作法』 p.153 グラフ社 1987
- 2) 奥田和子：『甲南女子大学研究紀要 23』 pp.183-199 現代若者における食事マナーの意識と変容Ⅰ 1986
- 3) 奥田和子：『昭62年度助成対象日本食生活文化調査報告集 5』 pp.55-71 現代若者における食事マナーの意識と変容Ⅱ 1988
- 4) 北山晴一：『美食の社会学』 pp.178-179, 朝日新聞社 1991
- 5) 石毛直道, 小松左京, 豊川裕之：『昭和の食』 p.143 1989
- 6) 石毛直道, 小松左京, 豊川裕之：同掲書 pp.225-227
- 7) 財団法人ベターホーム協会：「ベターホーム」8月号 p.78 1992
- 8) 奥田和子他：「兵庫県栄養改善研究発表会演題内容抄録」 p.17 ハンバーガーショップと若者の受容態度 1990
- 9) 高取正男：『高取正男著作集 4』 生活学のすすめ p.150 法蔵館 1982
- 10) 倉林正次：『儀礼文化序説 儀礼文化叢書』 p.211 桜楓社 1982
- 11) 高友正男：同掲書 p.149
- 12) 奥田和子：『現代食生活論—21世紀へ向けての食生活づくり』 pp.90-91 講談社 1989
- 13) 梅棹忠夫：『美意識と神さま』 p.335 中公文庫 1985
- 14) 梅棹忠夫：同掲書 p.165
- 15) 梅棹忠夫：『世相観察 あそびと仕事の最前線』（対談奥田和子） pp.167-185 講談社 1991

- 16) 杉山平一：「苜蓿」 20 p.46 創元社 1992
- 17) 多田道太郎：『しぐさの日本文化』 p.114 筑摩書房 1982
- 18) 多田道太郎：同掲書 p.130
- 19) 奥田和子他：「兵庫県栄養改善研究発表会演題内容抄録」 p. 21 テーブルの高さと姿勢との関連性 1990
- 20) 根岸謙之助『しつけと遊びの民俗』 p.49 桜楓社 1980
- 21) 松原治郎，佐藤カツコ：「現代のエスプリーしつけ」 113 p.101 至文堂 1976
- 22) 朝日新聞 4 ページ「首相，トウモロコシ試食断る」「行儀が悪いから」 1992.
9. 8